

志の道

今日は、講演会講師の小野晋也先生の本から、『志の道』を紹介します。志の道は、愛媛県四国中央市の新宮町というところにあります。そこに先生は、12の石碑を建てています。その石碑には、先人の生きた証としての深い言葉が刻まれています。私も十数年前に一度伺ったことがあり、先生は、「あそこに石がある」というモノとしてのレベルで歩く限り、この「志の道」の意味が良くわからないでしょうといわれます。石碑の言葉は、その人が一生涯を通じて貫いた言葉で、その人間を象徴的に現しているだとおっしゃっています。

第一の石碑は、松下幸之助氏（松下電器「現パナソニック」の創立者）の言葉です。

自分には自分に与えられた道がある
天与の尊い道がある
どんな道かは知らないが
他人には歩めない
自分だけしか歩めない
二度と歩めぬかけがえのない道

私たちが生きるということは、その人だけに与えられた一本の道を歩むことに良く似ているという意味でしょう。

また、諸富祥彦氏の「生きて行くことの意味」という本にも、

「どんなときも、人生には意味がある。
なすべきこと、満たすべき意味が与えられている。
この人生のどこかに、
あなたを必要とする<何か>があり、
あなたを必要とする<誰か>がいる。
そしてその<誰か>は、
あなたに発見されるのを<待って>いるのである。
どんな時も・・・待っているのである」

一人ひとりの人生の旅がどんな旅になるのかは、その人がどんな思いで生きているかによって決まるものなのです。